

逆走の闇

高木徳一



桜こそ パツと咲き散り 惜しまれつ

重ねし年の輪 味わい深し

二回目の観桜会の集合場所は浅草雷門である。

週日でも人出が徐々に増え、人力車で欧米人が觀光している。昨年開かれた五十年振りの中学のクラス会は春の嵐に出迎えられたが、今年は前後夜来の風がピタツと止み、気温もグングン上がり、高遠陽介は上着を脱ぐ。参加者は昨年の十人に加え、切れ長の目をした松山寿美江が一人多い。彼女は時々、日本画の個展を三越で開いている由。

一行が仲見世を歩み始めると、中国語が前後左右から飛んできた。昨年までは韓国語であったが、韓国の経済大不況で観光客が激減している。

五重塔はきらびやかだが、浅草寺本堂には改修用の足場と網が掛けられ、治療中で残念。昨年はお互い何処となくごちなかつたが、今は親密さが増し、隣同士の会話が心の底から弾んでいる。

それぞれがそれぞれの願いを観世音菩薩像の前で合掌の手に託した。

西へ進み、花やしき前にある間口二間の二階家で、看板に『居酒屋富子』と書かれた前に来た。

「ここが我が家よ。室田とみ子の名前を漢字に直し、富が自分にもお客さんにも届くようにと名付けたの」「いいじゃないか。花見の稼ぎ時なのに、店を閉めてるとは勿体ねえな」着流しスタイルの田所勝一が顎鬚をしながら濁声を出す。

「いいのよ。一日の利益より、皆さんに会って元氣や楽しさを頂いた方がずーっと心の得よ。是非、お友達を連れて来て下さい。皆さんなら当然半値にしますから」「そうだな、今度女房を誘つて来るか」「待つてるわ、矢島君。内は周りより二割安くしてるから人気なの。芸人の萩本欽一さんや坂上二郎さん、それに関敬六さんとも見え、色紙を頂いたわ」「有名人と言えば、僕は医学大会で大阪に出張した際、近鉄ホールのエレベーターで益田キー

略がいいと思うよ」

陸橋の上からは満月が微笑み掛け、下からはレール音が響く。

陽介は総武線で新宿に、正子は市川へと互いに逆方向の電車に乗った。

七月七日の昼下がり、ビルの先端から入道雲がちらりと見え、七夕祭りで世間は賑わいを見せていると言うのに、自分は何故こんな心の苦しみを味わわなければいけないのかと、陽介は神仏を恨んだ。

霞ヶ関の東京地方裁判所の赤レンガ庁舎は厳肅で四角四面の顔で、陽介を迎える。原告側証人控え室で、検事からこまごました法廷内の決まりを聞く。いよいよ開廷が近くなり、関係者は法廷内に入った。陽介は呼ばれるまで待機する。証人は初めてであり、陽介の上下紺色のスーツから覗く両手両足は小刻みに震えている。間も無くして順番が来て、廷吏に伴われ、静まり返った廷内に脚を

踏み入れた。全員視線を一身に集め、歩きが

ぎこちない。証言台に促され、一礼した。真実のみを話す事を誓い、虚偽の発言は罪になる事と黙秘権がある事を裁判長から告げられた。

事件当日の恋人とのデートの経緯と事件、更に犯人に対する感情を検事から尋問された。

六月五日の午後四時に御茶ノ水駅の御茶ノ水橋口改札で藤木正子と待ち合わせして、夕食を食べた後、新宿のオデヨン座で『風と共に去りぬ』の映画を鑑賞する予定であったと伝える。その時刻に行くと、彼女に会えず、そこで女の人が刺され、病院に救急車で運ばれたと聞いた。

実際は、解剖学の教授が欧州での学会準備で一時間早く、講義を終えたため、そのまま駅を通り越して明大通りを下り、書店で専門書を立ち読みしていた。救急車のサイレンで腕時計を見ると、約束時間を十五分オーバーしており、急ぎ足で坂を駆け上ったのだ。今から考えれば約束時間を守っ

続きは  
完成版で  
お楽しみ下さい。